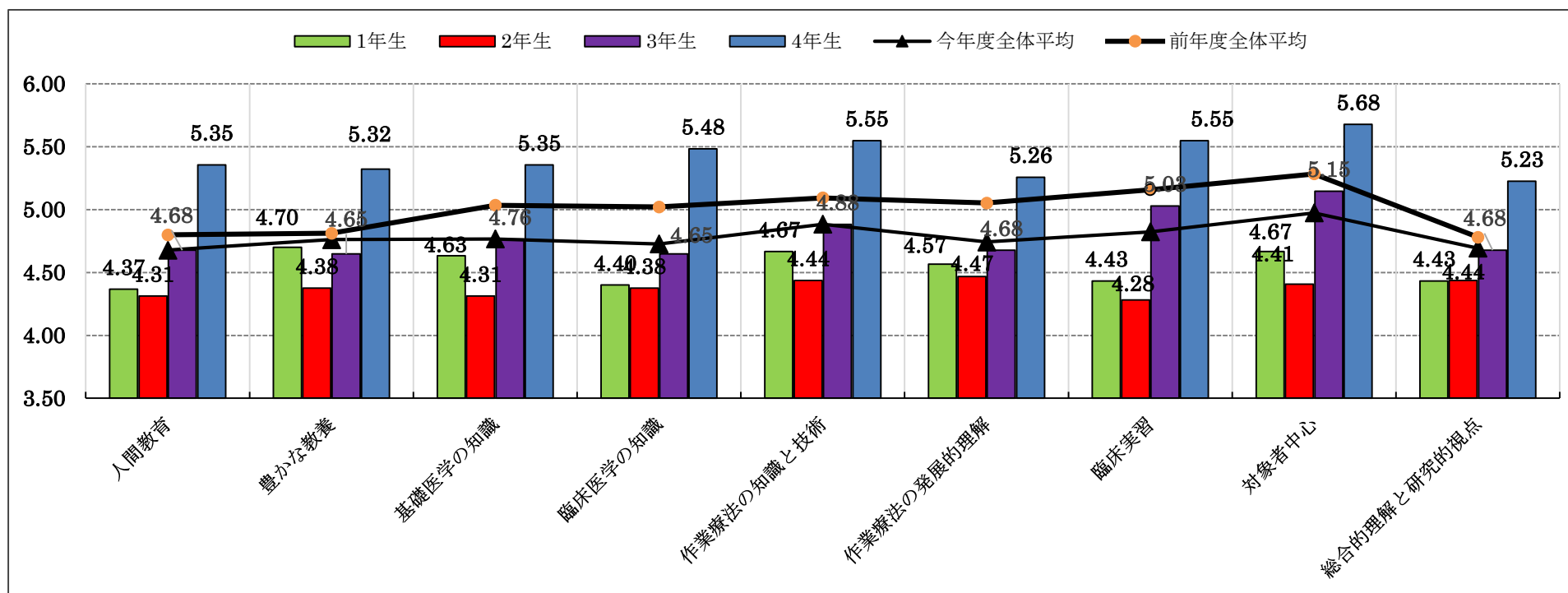


2023年度 教育課程編成・実施の方針に照らした教育の取組の適切性に関する検証

学科・研究科専攻名 リハビリテーション学科

作業療法学専攻

- ・分析対象の内訳：1年生 30名（73.4%）、2年生 32名（84.2%）、3年生 34名（89.5%）、4年生 31名（70.5%）。
- ・全体的な傾向・充足度合：今年度は、5月にCOVID-19が5類感染症に移行したことに伴い、臨床実習をはじめとする本来のカリキュラムに大きな制約はなくなり、1年生から臨床の場での経験を得ることができるようになったため、概ね学年が上がることに従い、学内教育および実習経験に応じた値となった。一方で、他の学年に比して2年生の値が低い結果となった。これは基礎医学の知識や、作業療法の知識と技術、加えて初めて経験する長期実習で直面した自己の課題などに対し、学習していく必要性を感じた結果と考えられる。
- ・前年度との比較：昨年度は学年による回答率の大きな差があったため、今年度の全体平均との単純な比較はできないが、全ての項目でやや下回った結果となった。次年度に向けた課題としたい。



理学療法学専攻

- ・分析対象の内訳：1年生入学時46名、終了時37名（入学時100.0%、終了時80.4%）、2年生データ40名（85.1%）、3年生データ3名（7.3%）、4年生44名（89.8%）であり、3年生のアンケート回答率は低調に終わった。
- ・全体的な傾向・充足度合：1年生～4年生の各学年において、各項目のスコアが中間点である3.0を大きく越え、多くは4.5～5.0の間の結果となった。各学年それぞれの教育課程において、学生それぞれが真摯に取り組んでいる結果と考えられ、教育課程の編成・実施の方針はほぼ適切に満たされていることが伺われる。「自分の責任と協調性」の項目にて、1年生の結果が最も高くなったが、大学生になり責任を持ち他者との協調性を大事にするという思いで1年間取り組んだ結果と想像する。今回、3年生の回答率が低く、全体的な傾向を捉えるには不十分である。次年度以降の回答率を上げ、分析・検討ができるように取り組んでいく。
- ・前年度との比較：すべての項目で前年度よりも高値を示した。昨年度までは新型コロナウイルスの影響によりオンライン授業が多かったが、今年度は、対面授業が増え、学生同士でのディスカッション、教員との対話が増えたことも要因の1つと考える。他者との関係の中で、自分の考えを振り返る機会、様々な経験における気づきの機会が重要であると考え。

